



	Page
Prologue	1 ~ 2
News	3 ~ 10
Reports	11 ~ 17
Academic Information	18 ~ 23
Overview of Academic, Research, and Funding Institutions in Nordic and Baltic Nations	24 ~ 27
Notice	28 ~ 29

日本における科学報道の特異性 —「タテ社会」の反映

JSPSストックホルム研究連絡センター長 津本 忠治

科学研究の成果に関する日本の新聞、テレビなどマスメディアの報道には大変違和感を生じるものが多い。最も変だと感じるのは見出しである。「〇〇大学が△△を発見」とか「◇◇研究所が□□の治療法を開発」とか、あたかも大学や研究所などが研究を行って成果を得たような見出しになっている場合が多い。しかし、実際に研究を行い報道されたような成果を得たのはその大学や研究所に所属する研究者、研究室（いわゆるラボ）メンバー、或いは研究グループである。研究者コミュニティから見れば、報道された成果は〇〇氏、◇◇ラボ或いは△△氏のグループが学術誌に論文発表した研究結果であり、大学や研究所が研究をして成果を得たとみなすような報道に違和感をもつ研究者は多いのではなかろうか。個々の研究者は自分が大学や研究所を代表して研究しているわけではなく、自ら重要と思う科学上の疑問を解明すべく、或いは最初に掲げた目標を目指して研究しているわけであり、得られた成果は多くの場合自分のラボメンバーやグループの成果と考えているであろう。この意識のズレが科学記事、特にその見出しに接した場合研究者が少し奇異に感じる理由と思われる。

何故、日本のマスメディアにおける報道にはそのような研究者との意識のズレがあるのだろうか？ 勿論、新聞などの記事、特に見出しは短い方が良いので〇〇大学の△△研究室、或いは□□研究所の△△氏のグループの発見と書くと長くなるので、大学や研究所がそのような発見をしたような見出しになるという説明を聞いたことがある。さらに、最近は日本の大学や研究所などの研究機関がプレスリリースを推奨していることも日本のマスメディアの報道ぶりを後押ししているかも知れない。マスメディアに大学や研究所の成果として科学記事が出ればその大学や研究所の得点になるのであろう。しかし、北欧を含めて欧米のマスメディアの報道ではそのような研究組織が前面に出るような記事はほとんど見られない。〇〇大学の△△研究者□□氏（△△には例えば物理学とか神経科学とか研究領域が入る）或いは単に□□氏のグループが発見とかいったまず個人名を明確に出す記事が多いように思われる。このように日本のメディアと欧米のメディアの報道に違いがある理由は、単に見出しの長さといった表面的、形式的なものではなく、文化の違いに根ざした根深い理由があるように思える。

（次項に続く）



(https://pixabay.com/ja/photos/?hp=&image_type=&cat=&min_width=&min_height=&q=%E6%8F%A1%E6%89%8B&order=popular)

有名な中根千枝氏の「タテ社会」(参考文献1)などですでに指摘されているように、日本人の意識には個人よりも組織を重視する、つまり自分がどの組織に属しているのかを重要視する文化がある。例えば、初めて参加する集会で自己紹介をする時に〇〇大学、或いは◇◇研究所の△△です、と機関名が先に出てきて最後に個人名が出てくることが多い。或いは、日本の役所や会社では〇〇さんと名前だけで呼ぶよりは〇〇課長や△△部長と役職名を付けて呼ぶ場合が多い。極端な場合は課長とか部長とか役職名だけで個人名を呼ばずに話を通すこともある。小生の所属するセンターでもセンター長と役職名だけで呼ばれて違和感を感じることもある。このように、個人名ではなく、組織名や職名で呼ぶのは日本の文化や社会構造を反映したものであろう。恐らく、日本の新聞社などの報道機関でもこの日本型の意識構造が残っていて、まずは大学や研究機関の名前を出すのではなかろうか？ しかしながら研究者、特に自然科学研究者は論文発表にせよ学会発表にせよ国際的な基準(例えば、研究結果の新規性或いは重要性はまずはピアと呼ばれる同領域研究者の評価に基づく)を念頭において働いているので、成果の報道に接すればあの大学の〇〇氏或いはそのグループの発表とまず個人名を思い浮かべることが多い。

このようなグローバルな基準に基づく感覚からすれば大学名などの機関名だけの見出しであると奇異に感じることになる。

個人名、ひいては個人を重視する欧米の「ヨコ社会」では、研究者コミュニティのみならず一般的な会合における人付き合いでも当然役職名よりは個人名が重要となる。役職名でヒトを呼ぶことまずない。日常会話にせよ、学会における討論にせよ、パーティにおける談笑にせよ名前(特にファーストネーム)で呼び合うことが普通である。これは組織よりは個人が先に立つ文化を反映したものであろう。小生はストックホルムに来る前から、欧米の方々とはこのことを銘記してお付き合いをしたいと思ってきたが、最近では歳のせいとお会いする人の名前の記憶には大変苦勞している次第である。

参考文献

1. 中根千枝、「タテ社会の人間関係: 単一社会の理論」 講談社現代新書 1967年7月

着任者の御紹介

タシマ マリカ 現地職員

ストックホルムセンターの現地職員
タシマ・マリカです。

1年間子育てに夢中でしたが、10月から職場に復帰いたしました。シンポジウムやセミナーで皆様にお会いできるのを楽しみにしております。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



サマースクール2017の開催

2017年8月14日～25日、慶應義塾大学、カロリンスカ医科大学、北京大学、キングス・カレッジ・ロンドンの共催により、カロリンスカ医科大学にてサマースクールが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、山下国際協力員が参加した。

今回のサマースクールは、テーマを「脳の老化」と題し、脳の老化とその細胞及び分子メカニズムの理解を高めることを目的として、大学院生を対象に実施された。各校からの講師や大学院生のほか、一般参加者も多数参加した。

8月16日にはカロリンスカ医科大学内のノーベル・フォーラムでミニシンポジウムが開催され、岡野栄之慶應義塾大学医学部長の講義から始まり、カロリンスカ医科大学、北京大学、キングス・カレッジ・ロンドンの各講師による講義が行われ、参加者は熱心に耳を傾けた。講義終了後に行われたストックホルム研究連絡センター主催のレセプションでは、参加者が親睦を深め、情報交換を行った。



講演者の集合写真



講演する岡野医学部長

2017年度第1回スウェーデン同窓会セミナーの開催



セミナー参加者の集合写真

2017年8月23日～24日、リンショーピン大学にて2017年度第1回スウェーデン同窓会セミナーが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、オスカー現地職員が参加した。

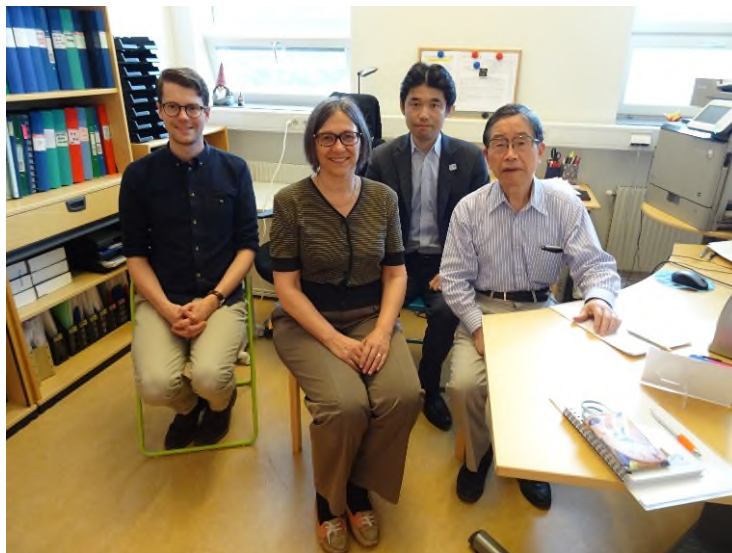
「Andrology: Reproduction and health during a man's lifetime」と題して、2日間にわたり男性学をテーマに講演が行われた。オーガナイザーのHeriberto Rodriguez-Martinezリンショーピン大学教授の挨拶で開会し、津本センター長による事業説明が行われた。続いて、大隅典子東北大学教授をはじめとする各分野の専門家による多様な研究発表が行われた。講義後の質疑応答に続いて、懇親会においても参加者間で活発な意見交換が行われた。

(P.11に大隅教授によるレポートを掲載)

汎北欧同窓会会長スカイプ会議の開催

2017年8月25日、ストックホルム研究連絡センターにてスカイプを利用して汎北欧同窓会会長会議が開催された。スウェーデン同窓会のGöran Thor会長、フィンランド同窓会のKristiina Jokinen会長、デンマーク同窓会のCarl Winsløw会長のほか、ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、オスカー現地職員が参加した。

各会長より同窓会の活動報告が行われた後、各同窓会活動の充実に加え、3つの同窓会で連携した取組の可能性など更なる同窓会活動の活性化に向けた意見交換が行われた。



左から2人目 : Jokinen会長

2017年度第1回 KVA-JSPSセミナーの開催



セミナー会場の様子

2017年9月4日、6日、7日に、それぞれウプサラ大学、カロリンスカ医科大学、ヨーテボリ大学にて、2017年度第1回KVA-JSPSセミナーが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、岡本国際協力員が参加した。

同セミナーは当センターとスウェーデン王立科学アカデミー (KVA) との共催により、スウェーデンの各分野の研究において指導的役割を担うアカデミー会員の推薦に基づき、同国内での関心が高い著名な日本人研究者を招へいして講演を行っているものである。今年度1回目の招へい講師として、理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センターの工樂樹洋ユニットリーダーが講演を行った。

講演では、様々なデータ、グラフや写真等が提示され、最先端の研究成果が発表された。

講演後の質疑応答では、参加者から多くの質問が寄せられた。また、セミナー冒頭では、当センターの事業説明が行われ、会場に用意されたブースでは当センターの活動内容についてアウトリーチ活動を行った。

(P.12に工樂ユニットリーダーによるレポートを掲載)

2017年度第2回 KVA-JSPSセミナーの開催

2017年9月4日、6日、7日、8日に、それぞれルンド大学、カロリンスカ医科大学、ウプサラ大学、カロリンスカ医科大学にて、2017年度第2回KVA-JSPSセミナーが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、山下国際協力員が参加した。

今年度2回目の招へい講師として、筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構の裏出良博教授が講演を行った。

4日には、「Biochemical properties of lipocalin-type prostaglandin D synthase」をテーマに講演が行われた。その後の講演においても、文部科学省の「世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)」において、WPI拠点として採択された同研究機構での最先端の研究成果が、具体的な事例紹介とともに発表された。講演後には質疑応答が活発に行われ、関心の高さが伺えた。なお、いずれの日もセミナー冒頭では、当センターの事業説明が行われ、会場に用意されたブースでは当センターの活動内容についてアウトリーチ活動を行った。

(P.13に裏出教授によるレポートを掲載)



講演する裏出教授

2017年度第3回 KVA-JSPSセミナーの開催

2017年9月18日、19日、21日に、それぞれカロリンスカ医科大学フッディングキャンパス、ウプサラ大学、カロリンスカ医科大学サイライブラボにて、2017年度第3回KVA-JSPSセミナーが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、吉原副センター長、岡本国際協力員が参加した。

今年度3回目の招へい講師として、理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センターのPiero Carninci 部門長が講演を行った。

講演では、現在の研究成果に至る過程において、日本でのプロジェクト開始からの苦労や経験なども語られ、会場一杯に集まった参加者は熱心に聞き入っていた。

なお、セミナー冒頭では、当センターの事業説明が行われ、会場に用意されたブースでは当センターの活動内容についてアウトリーチ活動を行った。

(Carninci部門長によるレポートは次号掲載予定)



講演するCarninci部門長

東京大学ーストックホルム3大学学術交流フォーラムの開催

2017年9月20日～22日、カロリンスカ医科大学にて東京大学ーストックホルム3大学学術交流フォーラムが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、山下国際協力員が参加した。

「Workshop on Active Ageing-Living longer and healthier in an ageing world-」と題して、老化と健康をテーマに講演が行われた。シルヴィア王妃、山崎純在スウェーデン日本国大使の御臨席の下、本フォーラム共同主催機関の代表者である、Ole Petter Ottersenカロリンスカ医科大学学長、Sigbritt Karlssonスウェーデン王立工科大学学長、Astrid Söderbergh Widdingストックホルム大学学長、光石衛東京大学大学執行役・副学長による挨拶で開会した。フォーラムでは、講演、討論、グループディスカッションが実施され、100名以上が参加した。各大学の研究者より、本テーマに関連する最先端の研究成果が日本とスウェーデンの比較を交えて発表された。2日目の午後には津本センター長による事業説明が行われた。講演終了後には参加者全員を対象とした懇親会が開かれ、両国の研究者が情報交換を行い親睦を深めた。

(P.14に北村准教授／角田係長によるレポートを掲載)



講演する関村副学長・国際副本部長

東京大学ーストックホルム3大学の協定署名式へ参加



署名式の様子

(Photo: Anna-Karin Landin)

2017年9月25日、ストックホルム大学のSpökslottetにて、東京大学とストックホルム3大学(ストックホルム大学、スウェーデン王立工科大学、カロリンスカ医科大学)の間で戦略的パートナーシップに係る協定の署名式が開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長が参加した。Astrid Söderbergh Widdingストックホルム大学学長主催の夕食会の冒頭で署名式が執り行われ、その後、参加者間で意見交換を行い、親睦を深めた。

スウェーデン同窓会幹部会の開催

2017年9月18日、スカイプミーティングにてJSPSスウェーデン同窓会幹部会が開催された。Göran Thor会長より汎北欧同窓会会長会議について、また、Imre Pázsit教授よりスウェーデン同窓会セミナーについて、それぞれ概要が共有された。また、今年度開催予定のSweden-Japan Academic Networkについては、ストックホルム研究連絡センターと連携して、詳細を決定していくことが確認された。

2017年ノーベル賞受賞者の発表

医学・生理学賞

- Jeffrey C. Hall (アメリカ)
 - Michael Rosbash (アメリカ)
 - Michael W. Young (アメリカ)
- 授賞理由:「体内時計を調整する分子メカニズムの発見」

物理学賞

- Rainer Weiss (アメリカ、ドイツ)
 - Barry C. Barish (アメリカ)
 - Kip S. Thorne (アメリカ)
- 授賞理由:「LIGO検出器開発と重力波観測への貢献」

化学賞

- Jacques Dubochet (スイス)
 - Joachim Frank (アメリカ)
 - Richard Henderson (イギリス)
- 授賞理由:「溶液中における生体分子を高分解能で構造決定するためのクライオ電子顕微鏡の開発」

文学賞

- カズオ・イシグロ(イギリス)
- 授賞理由:「強い感情的な力を持つ小説の中で、世界との関係に対する幻覚のような意識の下にある底知れぬ深みをあらわにした」

平和賞

- International Campaign to Abolish Nuclear Weapons (ICAN)
- 授賞理由:「核兵器がもたらす破滅的な結果を人々に気づかせ、条約で核兵器の禁止に向けて草分け的努力を続けた」

経済学賞

- Richard H. Thaler (アメリカ)
- 授賞理由:「行動経済学への貢献」

今後、Alfred Nobel の命日である12月10日には、平和賞を除く各賞はストックホルム・コンサートホールにおいて、平和賞はノルウェー・オスロ市庁舎において、それぞれ授賞式が開催される。前後はノーベル・ウィークとして、各受賞者によるノーベル・レクチャーや晩餐会等のイベントが開催される。
詳細は次号にて報告予定。

本稿では、以下、読者にとって関心の高いと思われるノーベル賞の概要、授賞機関、選考プロセス、国別の受賞者数について記述する。

2017年ノーベル賞受賞者の発表

○ノーベル賞の概要

スウェーデン生まれの発明家及び経営者であるAlfred Nobelの遺言に基づき創設された賞。当初は、物理学賞、化学賞、医学・生理学賞、文学賞、平和賞から構成されており、最初のノーベル賞は、彼の死後5年後の1901年に授与された。その後、スウェーデン中央銀行が経済学的重要性を認識し、ノーベル賞に経済学賞を新設することをスウェーデン科学アカデミーに提案し了承され、1969年に最初の賞が授与された。

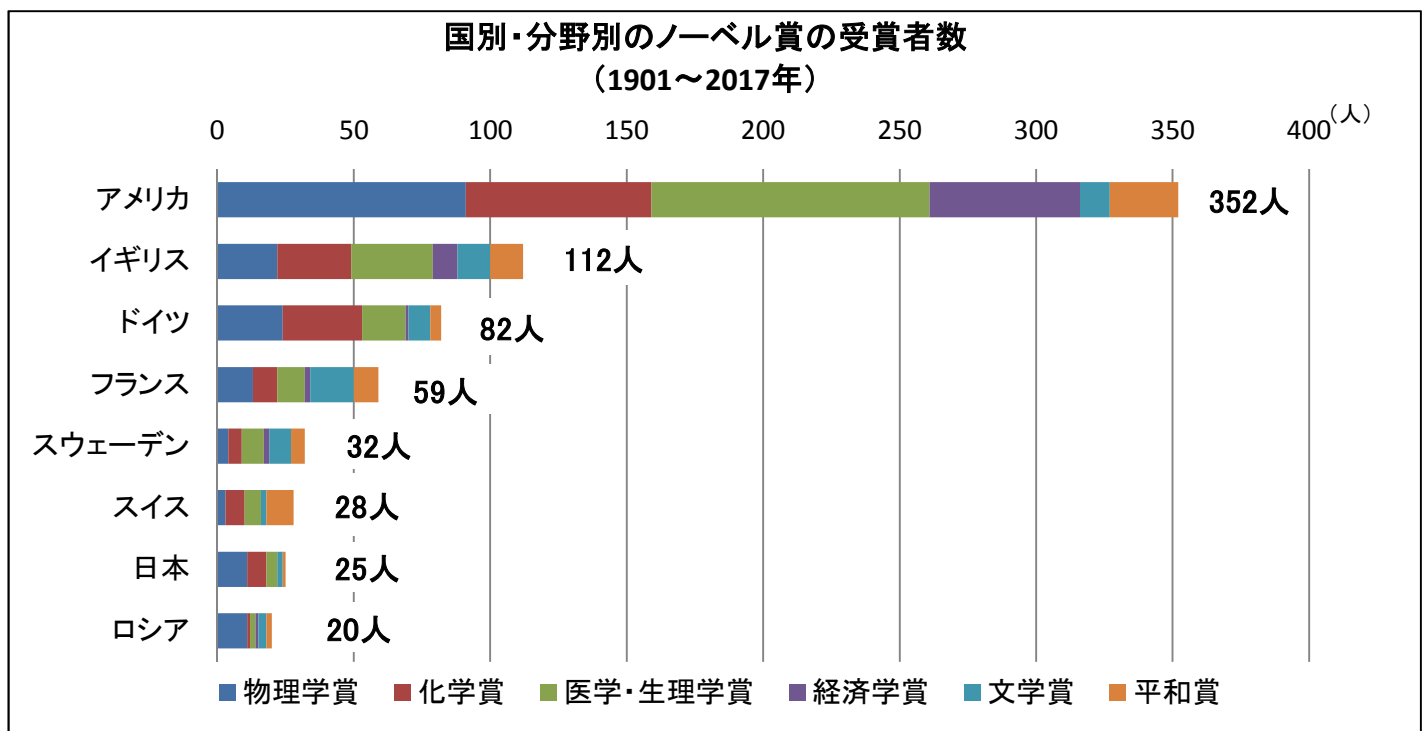
○授賞機関

各賞の選考や受賞は以下の機関で行われている。
物理学賞、化学賞、経済学賞：スウェーデン王立科学アカデミー、医学・生理学賞：カロリンスカ医科大学、文学賞：スウェーデン・アカデミー、平和賞：ノルウェー・ノーベル委員会

○選考プロセス

選考は発表前年の9月に始まる。まず、各賞の選考委員会が、世界各地の研究者、大学教授、過去の受賞者、議員に極秘に推薦を依頼する。推薦は翌年1月末に締め切られ、その後、国内外の著名な専門家の評価を受け、9月には、ノーベル委員会で作成された受賞候補者の詳細なレポートが各授賞機関に提示される。そして、10月上旬に、投票で受賞者が決められ、その直後に発表が行われる。発表までの詳細は極秘で、候補者や選考プロセスは受賞後50年を経ってから公表される。

○国別の受賞者数



【出典】文部科学省「文部科学統計要覧(平成28年版)」

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1383990.htm

※上記の「国別・分野別のノーベル賞の受賞者数(1901～2016年)」の図表に、2017年受賞者数をノーベル財団資料に基づき加筆。

【出典】ノーベル財団公式ウェブサイト

<https://www.nobelprize.org/>

MIRAIセミナーの開催

2017年10月16日～19日、ルンド大学にてMIRAIセミナーが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、山下国際協力員が参加した。

「Including Large-Scale Research Facilities and their Potential for Research and Society」と題して、持続可能性をテーマに日瑞の関係者による講演やパネルディスカッションなどが行われた。本セミナーは2015年10月に東京で開催された日瑞学長会議での合意を受けて立ち上がった、MIRAIプロジェクトにおける第1回目のセミナーである。日本側8大学、スウェーデン側7大学が参画し、学術関係者、政府関係者及び企業関係者が国内外から多数参加した。

Torbjörn von Schantzルンド大学学長による挨拶で開会し、両国の政府を代表して、上田光幸文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術戦略官(国際担当)、Jonas Björckスウェーデン教育省研究政策局長より、日本及びスウェーデンの科学技術政策の現状について講演が行われた。午前の締めくくりには、両国の代表的な学術助成機関として、津本センター長、Andreas Göthenberg事務局長より、それぞれJSPS、STINTの事業説明が行われた。午後は、「Materials Science」、「Sustainability」、「Ageing」の3つの分野に分かれてワークショップが実施され、両国の参加者は最先端の研究成果を共有し、活発な情報交換を行った。

(名古屋大学小野部長によるレポートは次号掲載予定)



パネルディスカッション



参加者間の交流の様子

2017年度第2回スウェーデン同窓会セミナーの開催

2017年10月19日、ボロース大学にて2017年度第2回スウェーデン同窓会セミナーが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、オスカー現地職員が参加した。

「スマートテキスタイル-医学と健康のための技術-」と題したセミナーでは、信州大学繊維学部西川敦教授を含む6名が講演を行い、どのように科学技術を取り入れたテキスタイルを医学や健康に結び付けるのかについて研究結果が報告されるとともに、その技術を応用した具体的な製品も紹介された。約90名の参加者が集まった今回のセミナー後には、ボロース大学繊維学部のキャンパスの視察も開催され、参加者は興味深く説明に聞き入っていた。(西川教授によるレポートは次号掲載予定)



参加者の集合写真

九州大学主催国際シンポジウムに参加

2017年10月20日、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)のカンファレンスセンターにて、九州大学主催、ストックホルム研究連絡センターの後援による国際シンポジウム“International Symposium on Self-Assembly, Colloid and Nanomaterials Chemistry”が開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長が参加した。渡邊公一郎九州大学副理事、津本センター長の挨拶により開会し、フランス、日本、アメリカ、スウェーデン、カナダ、ドイツからの著名な研究者による講演が行われた。参加者は最先端の研究成果を共有し、活発な意見交換が行われた。



講演した九州大学國武特別主幹教授
(九州大学ウェブサイトより転載)



挨拶する津本センター長



講演した九州大学高原主幹教授
(九州大学ウェブサイトより転載)

2017年度IVA-JSPSセミナーの開催

2017年10月25日、スウェーデン王立工学アカデミー(IVA)にて、ストックホルム研究連絡センター、IVA、瑞日基金(SJF)、在スウェーデン日本国大使館の共催により、2017年度IVA-JSPSセミナーが開催された。ストックホルム研究連絡センターからは、津本センター長、吉原副センター長、岡本国際協力員が参加した。株式会社ソニーコンピュータサイエンス研究所代表取締役社長兼所長の北野宏明氏及び、ストックホルム大学・スウェーデン王立工科大学(KTH)のAnders Lansner教授を講師に迎え、「ノーベル賞への挑戦—いつ、初めてのノーベル賞が人工知能(AI)に授与されるのか?」をテーマに、講演が行われた。スウェーデン・ストックホルムならではの興味深いテーマに、60名を超える参加者が集まり、AIの作成した音楽や様々なデータ、動画等が会場を盛り上げた。

(北野氏によるレポートは次号掲載予定)

当日の講演のストリーミング映像は、以下のURLから視聴可能

<http://www.iva.se/en/tidigare-event/the-nobel-turing-challenge--when-will-the-first-nobel-prize-be-awarded-for-ai/>



講演する北野氏



講演するLansner教授

2017年度第1回スウェーデン同窓会セミナーを開催して

東北大学大学院医学系研究科 教授 大隅 典子

2017年8月23日～24日にスウェーデンのリンショーピング大学において開催された日本学術振興会(JSPS)第1回スウェーデン同窓会セミナー「Andrology: Reproduction and health during a man's lifetime」に講師として参加した。オーガナイザーを務められたリンショーピング大学臨床実験医学分野のHeriberto Rodriguez-Martinez教授の御尽力により、「男性学」というキーワードのもとに、精子から老化までのライフスパンにまたがるトピックや、性同一性障害(最近ではgender dysphoriaという名称に変わってきたということも初めて知った)の方の心のケアからホルモン療法、生殖細胞保存まで、きわめて学際的な話題が提供され、まさに広く学術分野をカバーするJSPSの支援に相応しいセミナーであったと思う。

日本からの招待者として、私自身は「Paternal aging affects offspring's behavior possibly via an epigenetic mechanism involving a transcriptional repressor REST」というタイトルのもとに講演を行った。父加齢は(母親よりも)子供の自閉スペクトラム症発症リスクを上げることについては、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、オーストラリア及びイスラエルで為された疫学調査をもとにした577万人に及ぶメタ解析でも明らかになっているが、あまり着目されていない。しかしながら近年、結婚年齢の上昇や生殖補助医療の浸透に伴い、子供を持つ年齢が上がっていることは、この数十年の間に自閉スペクトラム症の発症率が非常に上昇したことの生物学的な理由として、興味深いものと言えるのではないかと考えられる。そこで我々は父加齢がどのように精子のエピゲノム変化を介して次世代の行動に影響を与えるかについて、マウスをモデルとして研究を展開している。すでに、加齢精子において異なるDNAメチル化領域を見出しており、低メチル化領域に共通するモチーフとして転写抑制やクロマチンリモデリングに関わるRESTという因子の結合領域が浮かび上がった。また発生途中の加齢父由来脳原基では、発現上昇する遺伝子が多いことがわかった。これらの点と点がどのように繋がるかについて現在、研究を進めている。今回の発表内容は、論文として日の目を見るまでにはまだ時間がかかるが、ディスカッションの機会を得られたことは貴重であった。同セミナーは、初日のランチから始まって2日目のランチまで、コーヒブレイクやディナーも含めて、参加者の交流が図られるように配慮されていた。会場も、大学のカフェテリア近くの講堂であったので、食事やブレイクのアクセスも良く、講演後にできなかった質問を行うのに適していたといえる。

オーガナイザーのRodriguez-Martinez教授は、数年前に岡山大学に招聘研究者として滞在され、その後も何度も来日されたという方で、動物からヒトまでの生殖科学の分野のオーソリティである。また、その研究室の博士研究員Dr. Manuel Alvarez-RodriguezもJSPSの支援によりごく最近、山梨大学に5ヶ月滞在し、種々の実験手技を習うなど貴重な経験をしたという。このような方々からの口コミで日本の研究室に来て下さる方が増えることが期待される。私自身も発表のイントロで「是非、東北大学にもいらして下さい」とお伝えした。今回の参加者の中に、ぜひ将来、日本や東北大学に滞在して下さることがあることを祈っている。



講演する大隅教授



参加者の集合写真

2017年度第1回KVA-JSPSセミナーを終えて

理化学研究所ライフサイエンス技術基盤研究センター ユニットリーダー 工樂 樹洋

研究を続けていると、まったく別物だと思っていた知識、思索、そして人脈が思いがけないところでリンクすることがある。日々の研究や論文出版はたいてい予定通りか、むしろ大きく遅れるばかりで、結果はいつも事前の期待を下回りがちである。しかし、その思いがけず生じるリンクのおかげで、物事が有機的に動き出し、ときには、思考の段階を何段かスキップして、新しい境地を示してくれたりする。今回のスウェーデン訪問はまさに、こういったリンクをいくつか産んでくれた。

かねてより親交のあったウプサラ大学のDan Larhammar教授が最初に私を誘ってくれたのはもう何年か前のことである。やはり冬は冷え込むので、10月になる前に訪問するのがよいという。Larhammar教授が中心となってKVA-JSPSセミナーへ申請していただき、結局、2017年度分の選考で採択と相成った。若輩者の私が見劣りするのでは間違いないであろうが、折角の貴重な機会である。日々の本務を暫く離れるためのアレンジを施したうえで、2017年9月にスウェーデンへと旅立った。

私はこれまで、分子進化学、発生生物学、そしてゲノム情報学、という、互いに関わりながらも解析アプローチや研究者コミュニティが全く異なる分野を渡ってきた。目指したのは「渡る」ことではなく、それらの分野を「繋ぐ」ことであるが、そのための努力はまだまだ足りないと感じている。同じく、分野を「繋ぐ」ことに情熱を燃やしているのが、Larhammar教授である。よりシニアで実績のある彼の場合は、神経内分泌学で実績を重ねたのち、分子進化そしてゲノム情報の世界に足を踏み入れたといっていよう。1990年代前半にその手助けをしたのが、ゲノム配列を用いた解析によって初めて全ゲノム重複が起きたことを示したLars G. Lundin博士であった。進化学的アプローチとゲノムワイドな視点によって、ヒトの生命現象の分子基盤の成り立ちが見えてくるだけでなく、多様な生物がどのように異なる特徴を獲得したのか、その理解へ近づくのである。

私は、9月4日にウプサラ大学の定例イベントであるSvedbergセミナーの枠で、脊椎動物の進化の黎明期に起きた、いわゆる全ゲノム重複について講演させていただいた。ウプサラ滞在は実質2日間であったが、Larhammar教授やLundin博士とゲノムの進化について深く議論しただけでなく、さらにPer E. Ahlberg教授の研究室を含む4つの研究室を巡り、形態やゲノムの進化、そしてそれを調べるための解析手法について意見交換した。なかでも、スウェーデン全体の生命科学研究の基盤施設であるSciLifeLabを指揮するUlf Gyllenstein教授との面会は印象的であった。私自身が、所属研究機関において、生命科学の広範な解析技術を扱う基盤施設の指揮を任されているからである。装置の配備、人材の確保、そして成果の定義など、その運営体制についての意見交換はいつも非常に有意義である。

9月6日の朝にウプサラを発ち、ストックホルムのカロリンスカ医科大学へ向かった。ここでは、ゲノムから遺伝子が失われる現象について、新たな仮説を提唱する講演をさせていただいた。分野が大きく異なる研究者の興味を惹くことができるか自信はなかったのだが、予想以上に的を得た質問を受けることができたのは幸運であった。たった5時間程度の滞在であったが、対応いただいたSten Linnarsson教授の気の利いたエスコートのおかげで縁のある若手日本人研究とのコンタクトも実現し、大きな刺激となった。

6日の午後に列車に乗り、西海岸のヨーテボリへ向かった。スウェーデンでは、大学や研究機関だけでなく空港や駅でも、eduroamアカウントによる無線LANが利用できるのには驚いた。教育や学術研究に携わる者を支える体制の違いはこういったところにも現れる。ヨーテボリ大学では、9月7日に、植物園に隣接したキャンパスにおいて、海生大型脊椎動物（とくにサメ類）の全ゲノム解析についてセミナーを行った。対象は違えど、海に棲み分子情報が希少な生物を扱うという接点を感じて聴講してくれた研究者から、貴重なコメントをいただくことができた。翌日8日は、ホスト役であるTomas Larsson博士に、同大学のKristineberg臨海研究所へ案内していただき、私自身が馴染みのない冷水域の海洋生物についての調査や研究について様々な知見を紹介してもらうことができた。

3か所でのセミナーを通して、自身の研究に関する深いインスピレーションが得られたことは言うまでもない。さらに、予期せぬところから、これから時間をかけて考えていきたいテーマについての洞察が得られたように思う。海産物に依存した遠方の国で、一般の人々や研究者が生物多様性をどう捉えているのか、そして、日本の学術研究の競争力低下が話題になる中、その巻き返しに必要と思われる組織の構造と人材配備はどうあるべきか、などである。Larhammar教授をはじめ、このような貴重な機会を実現してくれた方々へ改めて謝意を表したい。



講演する工樂ユニットリーダー

2017年度第2回KVA-JSPSセミナーを終えて

筑波大学 WPI-国際統合睡眠医科学研究機構 教授 裏出 良博

今回、スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)より選ばれ、日本学術振興会(JSPS)、KVA及び世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)の共催セミナーとしてスウェーデン国内で本年9月4日から8日まで、私のライフワークであるプロスタグランジンD₂(以下、「PGD₂」と略す)に関する4回の講演を行った。PGD₂は、2種類の異なる酵素(L型とH型合成酵素)で作られる生理活性脂質であり、2種類(DP1とDP2)の受容体を刺激して、睡眠や炎症反応に関与する。

ルンド大学ではBo Åkerström教授がホストを務め、彼が研究するリポカリン蛋白質 α_1 -microglobulinと同じ進化的起源を持つL型酵素に関する講演を行った。彼とは2005年コペンハーゲンでのBenzonシンポジウム以来の交流があり、「65歳の定年を延長して仕事を楽しもうと思う。」と話していたので、もう少し共同研究が進められそうである。

カロリンスカ医科大学では、ノーベル医学・生理学賞の選考委員長を務めたBertil Fredholm名誉教授と臨床の睡眠研究者であるTorbjörn Åkerstedt教授がホストを務め、PGD₂とアデノシンによる睡眠調節を紹介した。Fredholm名誉教授とはカフェインの覚醒作用がアデノシンA_{2A}受容体に依存することを証明した2005年のNature Neurosci.の論文を共著で発表した。この研究はその後、同受容体を活性化する清酒酵母を用いた2015年の睡眠サプリメントの開発や、側坐核のアデノシンA_{2A}受容体発現神経が動機付け覚醒の中枢であることを証明した本年のNature Commun.の論文へと繋がっている。

ウプサラ大学バイオメディカルセンターでは、蛋白質結晶化の専門家であるTerese Bergfors上級研究員がホストを務め、L型とH型酵素の立体構造の講演を行った。特に、我々が20年以上続けている国際宇宙ステーションの無重力環境での高品質蛋白質結晶作成実験と、それを応用したH型酵素の阻害薬開発を紹介した。講演会場には結晶構造解析用ソフト「O」を開発し、リポカリン蛋白質の結晶構造を世界初で決定したAlwyn Jones名誉教授(70歳)が居て活発な議論ができた。リポカリン蛋白質の専門家は世界にも少なく久々に興奮した楽しい時間を過ごせた。

再度カロリンスカ医科大学に戻り、Fredholm教授がホストを務めて、L型酵素がPGD₂の産生と同時に細胞外輸送を行う可能性と、H型酵素阻害剤が治療法のない難病であるデュシェンヌ型筋ジストロフィーの筋萎縮を抑制し、患者での第2相臨床試験が日本で進行中であることを紹介した。

同国訪問は2010年にノーベル財団の招待講演でカロリンスカ医科大学を訪れて以来であった。この間、事務棟は「タイタニック」と称される超モダンな建物に代わり、向かい側には巨大な病院棟の建築が進み、周辺の再開発で見違えるように変貌していた。

この国の人口は1,000万人ほどで東京より少ないが、世界の科学を牽引し続けている。講演を行った同大学の薬理学講座はAlfred Nobelに医学・生理学賞の創設を提言したJöns JohanssonやプロスタグランジンやサブスタンスPを発見し1970年のノーベル賞を受賞したUlf von Eulerが教授を務め、同大学のSune Bergström、Bengt Samuelssonらによるプロスタグランジン類の構造決定による1982年のノーベル賞受賞へと続く伝統を持つ名門である。一方のウプサラ大学は1477年創設の北欧最古の大学であり、構造生物学の基本単位Åの起源となったAnders Ångström、酸と塩基のアレニウスの定義で有名なSvante Arrhenius、沈降定数の単位Sの由来であるTheodor Svedbergなど10数名のノーベル賞受賞者を含む多くの偉人を輩出している。これらの伝統ある研究室で自分の研究成果を発表できたことを誇りに思う。最後に、セミナーの支援をいただいた津本センター長を始めとするストックホルム研究連絡センターの皆様に感謝します。



講演する裏出教授



セミナー会場の様子

東京大学ーストックホルム3大学学術交流フォーラムに参加して ～国際ワークショップ「長寿かつ健康な高齢社会の実現」～

東京大学大学院教育学研究科 准教授 北村 友人／東京大学国際部国際企画課国際企画チーム 係長 角田 亜紀子

2017年9月20日から3日間にわたり、東京大学とストックホルム大学群(ストックホルム大学、スウェーデン王立工科大学(KTH)、カロリンスカ医科大学(KI))による「戦略的パートナーシップ」に基づく国際ワークショップが、カロリンスカ医科大学ノーベル・フォーラムで開催された。このワークショップでは、両国における重要な社会的課題である高齢化について、学際的な視点からこれまでの研究成果を共有するとともに、今後の共同研究の可能性について議論を交わした。日本からは、東京大学を中心に大阪大学、理化学研究所、東京都市大学などの教職員や学生が25名、スウェーデン側では、上記の3つの機関の教職員・学生、そして政府関係者を含めて100名以上が参加した。このワークショップは文部科学省スーパーグローバル大学(SGU)創成支援事業とストックホルム研究連絡センターの助成を受けて開催され、スウェーデン政府から日本・スウェーデン外交関係樹立150周年事業の一つとして認定されている。

初日にノーベル博物館で開かれたウエルカム・レセプションに続き、翌21日は、スウェーデンのシルヴィア王妃、山崎純在スウェーデン日本国大使の御臨席のもと、ワークショップが開会された。ストックホルム大学群を代表して、カロリンスカ医科大学のOle Petter Ottersen学長、東京大学の光石衛大学執行役・副学長が挨拶を行い、関村直人副学長・国際副本部長による戦略的パートナーシップ大学構築に関するプレゼンテーションの後、健康で活動的な高齢化を実現するための諸要件について、生物物理学、生物医学、社会科学の3つのアプローチから、さまざまな講演と議論が行われた。

22日には、上記の3つのアプローチに基づく分科会を開き、主に若手研究者を中心とした研究発表や、ストックホルムの3機関と日本の大学との間で今後どのような国際共同研究が可能であるかについて具体的な議論が行われた。そして、今回の国際ワークショップの締めくくりとして、KTH前学長Peter Gudmundson教授の司会のもとで、今後の日瑞の学術交流について活発な議論が交わされた。

今回の国際ワークショップは、東京大学が採択された文部科学省SGU創成支援事業の一環として開催された。この事業において東京大学は世界各地の主要な研究大学と戦略的パートナーシップを構築しており、スウェーデンに関してはストックホルムの3機関とワークショップ後の25日に正式な協定に調印をした。東京大学とストックホルムの3機関は戦略的パートナーシップの枠組みに基づき、Sustainabilityを共通のテーマとして、分野融合・部局横断の連携を進めており、学生交流、共同研究の実施など、今後の更なる協調と広範な分野での持続的かつ多様な交流等を推進する予定である。

日本とスウェーデンが外交樹立から150年を迎える来年(2018年)は、東京で再び国際ワークショップを開催することが決まっている。高齢化に関する議論を継続するとともに、両国で共通して社会的関心が高く学術的な要請も大きいテーマを他にも取り上げ、さまざまな角度から持続可能な社会を考える機会とする予定である。こうしたワークショップを通じて、両国間でこれまで積み重ねられてきた研究交流・人的交流に加え、専門分野を超えた交流の更なる推進が期待される。



中央:シルヴィア王妃
(Photo:Yanan Li)



参加者の集合写真
(Photo:Yanan Li)

鈴木 顕 在スウェーデン日本国大使館一等書記官の来会（8月2日）

鈴木顕在スウェーデン日本国大使館一等書記官が来会した。7月下旬に着任した同書記官から着任挨拶を受けた。今後、当センターが大使館と連携して開催する行事について情報を共有するとともに、引き続き、大使館と連携の下、学术交流の促進に取り組んでいくことを確認した。

中央:鈴木書記官



北海道大学ヘルシンキオフィス関係者の来会（8月10日）

田畑伸一郎北海道大学ヘルシンキオフィス所長、岡部赳大北海道大学ヘルシンキオフィス副所長、田畑朋子北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員が来会した。ヘルシンキオフィス所長、副所長の着任挨拶のほか、2月28日～3月1日にウメオ大学(スウェーデン)での開催を予定している「北海道大学交流デー」について情報提供がなされた。今後も、北欧諸国の関係機関と連携を強化し、学术交流の促進を支援していくことを確認した。

左端:岡部副所長
左から2人目:田畑伸一郎所長
右から2人目:田畑朋子研究員



スウェーデン研究・高等教育国際協力財団(STINT)事務局長訪問（8月21日）

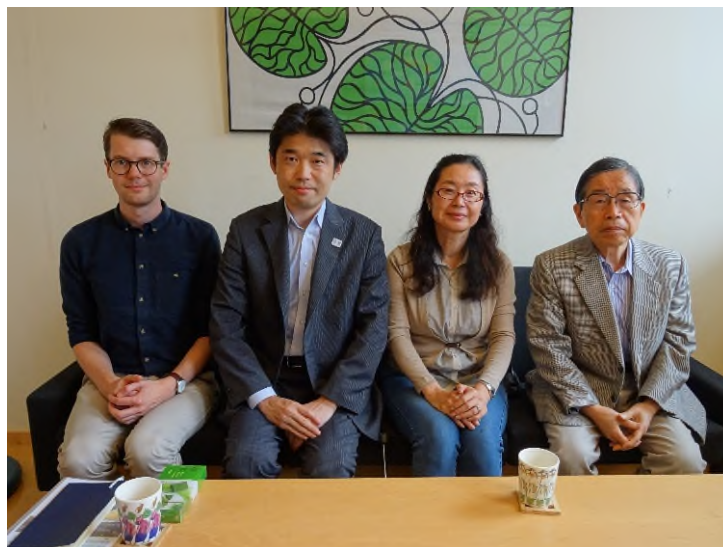
Andreas Göthenberg事務局長、Hans Pohlプログラムディレクター、Agneta Granlundアシスタントプログラムマネージャーを訪問し意見交換を行った。ストックホルム研究連絡センターからは津本センター長、吉原副センター長、山下国際協力員が参加した。Göthenberg事務局長より同財団の概要や事業について説明を受けた。今後、外国人研究者招へい事業はもとより、いかに、北欧諸国と日本の学术交流の促進に向けて連携していくかについての意見交換を行った。

大隅 典子 東北大学教授の来会（8月25日）

大隅典子東北大学教授が来会した。同氏は、8月23日～24日にリンショーピン大学にて開催された2017年度第1回スウェーデン同窓会セミナーで講師として男性学をテーマに講演を行うために来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。セミナーの感想やプログラムに関する意見をいただき、当センターとして今後のセミナー企画・運営の改善に役立つものとなった。

（関連記事:P3「ニュース」、P11「レポート」）

右から2人目：大隅教授



北島 江里子 前国際協力員の来会（8月30日）

昨年度の当センターの国際協力員であり、現在、東京工業大学学務部留学生交流課に勤務する北島江里子氏が来会した。今回、同大学の学生の短期留学派遣プログラムの引率のために来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。現在、当センターでの経験を活かして、所属大学の国際化に貢献している。

左から2人目：北島前国際協力員



馬場 幸子 大阪大学大学院医学系研究科医学科国際交流センター副センター長の来会（9月5日）

馬場幸子大阪大学大学院医学系研究科医学科国際交流センター副センター長が来会した。今回、来年2月に開催が予定されている大阪大学とカロリンスカ医科大学の合同シンポジウムの打合せのために来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。当センターとして協力可能な支援について確認した。

中央：馬場副センター長



裏出 良博 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構教授の来会（9月6日）

裏出良博筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構教授が来会した。今回、9月4日～8日にスウェーデン内各地で開催された2017年度第2回KVA-JSPSセミナーで講演を行うため来瑞し、この機会を活用して当センターを訪問した。今後のより良いセミナーの在り方や、スウェーデンと日本との学術交流の一層の促進に向けた意見交換が行われた。
（関連記事:P5「ニュース」 P13「レポート」）

左から2人目: Fredholm教授
中央: 裏出教授
右端: Wang氏



静岡大学関係者の来会（9月26日）

鈴木滋彦静岡大学副学長、青木徹静岡大学学長補佐が来会した。今回、大学間協定関係の打合せ及びルーマニアで開かれたInter-Academia Community会議に出席するために訪欧し、この機会を活用して当センターを訪問した。同大学の国際事業への取組を紹介いただき、最新の学術情報の交換を行ったほか、当センターと同大学間との今後の連携の可能性について議論を行った。

右端: 鈴木副学長
左端: 青木学長補佐



九州大学関係者の来会（10月3日）

幸野達也九州大学国際部国際企画課国際交流係長及び末永小織国際交流特定業務専門職が来会した。10月20日にストックホルムで開催予定である、九州大学主催の国際化学シンポジウムの事前打合せに来訪し、この機会を活用して当センターを訪問した。ストックホルム研究連絡センターは、当該シンポジウムの後援を行っており、イベントの成功に向けて連携を強化することを確認した。
（関連記事:P10「ニュース」）

左から2人目: 幸野係長
右から2人目: 末永専門職



(注)掲載内容は、ストックホルム研究連絡センターにおいて仮訳したものである。また、本文に記載のない箇所で説明が必要な箇所はセンターで追記した。

スウェーデン：留学生が厳しい在留制約に直面

Radio Sweden (SR) の報告によると、スウェーデン移民局は、スウェーデンに留学するための主な目的が勉学であることを十分に証明していないという理由で、スウェーデンの大学へ入学を許可され、奨学金の受領も認められている留学生の入国許可を10件以上却下した。

学生ビザを申請する際の志望理由書の言い回しと、海外のスウェーデン大使館で面接した際の印象を根拠に移民局が解釈し、これらの却下が行われた。

大学のウェブページを検索し、その言い回しを志望理由書に使用したことから、彼ら自身の勉学への意欲を十分に立証していないと見なされた。

ダッカの大学職員であるMamunur Rashid氏と、パキスタンの学生であるNeelam Peerzada氏は、500名の応募者のうち2名のみに与えられるルンド大学記念奨学金を授与された。その額は授業料の大半をカバーできるSEK290,000 (US \$ 35,900) (*約406万円) である。

彼らは、大学のウェブページを検索して調べ、志望理由書を書いた。また大使館での面接時にもそのことを繰り返して述べた。その結果、移民局は、彼らのスウェーデンでの留学の動機が説得力に欠けると判断し、留学ビザの申請を却下した。

ルンド大学国際関係部の国際部長であるRichard Stenelo氏は次のように述べている。「このことは、世界トップレベルの学生、大学院生の留学先として、諸外国がスウェーデンに抱く評判に悪影響を及ぼしています。移民局が、これらの選ばれし学生達の主な入国動機がスウェーデンで学ぶことではないと考えるならば、独自に判断するのではなく、私たちに相談するべきです。私たちは海外から優秀な学生を募るために、多くの人的資源を費やしているのです。」

スウェーデン移民局のJoel Martinsson氏は次のように述べている。「私達は、留学生を却下するにあたって間違った判断をしたことを真っ先に後悔しました。大学には、その学生が入学に値するかを確かめる能力がありますが、スウェーデンに入国する動機が勉強であるかどうかを判断する権限は移民局にあります。これは法律に明示されています。」

司法省の主任弁護士であるFredrik Bergman氏は「これは、移民局が規則を拡大かつ厳格に解釈した結果です。」と報道発表で述べた。

スウェーデン全国学生連盟の副会長であるCharlotta Tjårdahl氏は、University World Newsに次のように語っている。「学ぶ意志を持ち、入学を許可された学生は、大学で学ぶ権利があります。私たちは誰に対しても開かれた知識基盤社会の形成を望んでおり、学生を締め出すのは間違っています。」

Stenelo氏は、ルンド大学は現在、スウェーデン高等教育協会と協力し、留学生への対処を改善するよう移民局を説得していると語った。

【出典】University World News

<http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20170824082337898>



ルンド大学 図書館

スウェーデン：スウェーデンの大学で、留学生が住居の確保に苦戦

スウェーデンのルンド大学で、留学生が住居の確保に苦戦している。今年、通常彼らのために確保されているはずの500の部屋が確保できなくなったからである。この件を最初に報じたSveriges Radioによると、一部の学生は住居を見つけることができないため、最終手段としてワゴン車の中で生活したり、大学の変更も検討しているようだ。

「5月末、私たちは、住居の確保に非常に時間がかかりそうなグループや住居の確保の見込みがないと判断したグループに連絡し、どこか別の場所で住宅を探す必要があることを明確に伝えました。住宅ローンをしている学生だけが住居を確保できている状況で、それ以外には、住居の確保を約束されている人は誰もいません。」と、ルンド大学の住宅部門責任者であるNikolas Pieta Theofanous氏はThe Localに語った。

480の学生宿舍の喪失は、大学と学生向け住宅会社AFBostäderの間の契約終了によって引き起こされた。

「この契約が切れることは、ルンド大学の関係者全てに非常に明確に伝えられていたもので、我々は1年前からわかっていました。そのため出願時期から、本学は例年に比べ非常にわずかな住居しか確保していないので、今年の受験者は住居探しが非常に厳しいものになるだろうということをずっと強調してきました。」と彼は続けた。

大学は通常、留学生のために1,500軒の住居の確保を目標としているが、今年はどうあがいてもその数を確保できていない。その代わりに、他の情報源を通じて学生の住居探しを手助けしようと試みており、「春の終わりから夏にかけて、住居探しに関する質問に答え、探し方の指導をするために組織を強化しました。」とTheofanous氏は説明した。

スウェーデン全国学生連盟の住居に関する年次報告書によると、スウェーデンの13の都市は現在、新入生が最初の6ヶ月間に住宅を確保することが保証されていない「危険区域」であり、11の都市は、6ヶ月はかからなくとも、家賃が高すぎるか何か欠陥があるという状況である。一方、別の9都市では、1ヶ月以内に安全な住居に入れることが保証されている。

ルンドは危険区域の学生都市の一つであり、留学生にとって住居探しが困難であることが原因で、そこで学ぶことを諦めてしまう例が一般的になってきているとの報告もなされている。

【出典】The Local Sweden

<https://www.thelocal.se/20170829/international-students-struggle-to-find-housing-at-swedish-university>

スウェーデン：スウェーデンの若者に人気の就職先

最新の調査で、スウェーデンの学生や卒業生にスウェーデンの有名な企業を尋ねると、Googleが最も人気のある会社であることがわかった。世論調査会社Kantar Sifoは、人材派遣会社Academic Workから委託を受けて、スウェーデンの11,000人以上の若手専門家に質問し、その国のどの会社が最高評価を得ているかを調べた。

その結果、科学技術会社が、「若手専門家による人気指標」の上位10位の大部分を占めた。

Googleは3年連続で第1位となり、次に電気自動車メーカーのTeslaが第2位、スウェーデンの音楽ストリーミングスタートアップSpotifyが第3位となった。Academic Work InsightsのマネージャーIsabelle Ahlman氏は、「上位10社のうち6社がIT企業かハイテク企業であることはとても興味深いことです。」と述べた。

「若手専門家は、市場に挑戦し、その分野での開発と革新に貢献する企業のために働きたいと思っています。これは、もともと多くのIT企業やハイテク企業で、入社1日目から受け継がれる企業精神の一部です。そこから考えると、人気の高い業界で強力なグローバル企業ブランドをもつGoogleが、ここスウェーデンで人気第1位を維持しているのは何ら不思議ではありません。」とAhlman氏は付け加えた。

「トップ10に入っている全ての企業に共通しているのは、市場のリーダー及び革新者として見なされていること、そして福利厚生が充実していることです。それらの企業は、今行っていることに加え、今後の方針も明確です。」

Spotifyの他に、トップ10に入ったスウェーデンで設立した企業は、ゲーム会社のDice、家具大手Ikea、自動車メーカーのVolvoなどがある。

Facebookは今年トップ10に入っておらず、12位に終わった。

若手専門家による人気指標2017

1. Google、 2. Tesla、 3. Spotify、 4. Apple、 5. Microsoft、 6. Dice、 7. Ikea
8. BCG, The Boston Consulting Group、 9. McKinsey & Co、 10. Volvo

【出典】The Local Sweden

<https://www.thelocal.se/jobs/article/these-are-the-employers-young-swedes-like-the-most>

スウェーデン：スウェーデンのトップ大学のカロリンスカ医科大学が、世界大学ランキングで順位下落

スウェーデンで評判の高いカロリンスカ医科大学(KI)は、9月5日に発表された権威あるTimes Higher Education (THE)世界大学ランキング2018において、対前年比で10も順位が落ち込んだ。

ノーベル医学・生理学賞の受賞者選考を担当し、昨年世界のトップ1,000大学のうち28位にランクされたストックホルムのKIが、今年は38位に入った。THEの編集者であるPhil Batty氏がスウェーデンの通信社TTへ回答したメールによると、その結果はKIにとって“恥ずべき”ものであると述べられていた。

Batty氏によると、今回の順位の下落の大半は、著名なイタリア人外科医Paolo Macchiarini氏が関与した事件が起因しているとのことだ。その外科医は、自身が気管移植を行った患者の何人かが死亡した後、違法行為の告発を受けてKIから解雇された。

毎年同ランキングの採点を行う評価者は、自身の選択に動機づけを与える必要はないが、この場合(Macchiarini氏のケース)は要因になりえたとはいえないとBatty氏は語った。

しかし、今年順位が下落したスウェーデンの有名な大学はKIだけではない。ストックホルムのスウェーデン王立工科大学は159位から173位に、ヨーテボリ大学は170位から198位に落ちた。一方、ウプサラ大学は93位から86位、 Lund大学は96位から93位、ストックホルム大学は144位から134位へと上昇した。

2年連続でイギリスのオックスフォード大学が1位、ケンブリッジ大学が2位、カリフォルニア工科大学とスタンフォード大学が同率で3位となった。

合計77カ国が世界大学ランキングに参加している。

【出典】The local Sweden

<https://www.thelocal.se/20170905/swedens-top-university-karolinska-tumbles-in-global-ranking>

ノルウェー：ノルウェーの大学における英語の過度使用への懸念

ノルウェー言語評議会は、ノルウェーの大学やカレッジでの英語の使用量に懸念を示している。全国の高等教育機関の多くの授業は完全に英語で行われていると、NRK放送局が報告している。評議会は、あまりにも多くの英語を使用すると、修学中とその後の生活の両方に損失を与える可能性があると言った。

「私たちは特に、ほとんど全てが英語で行われるプログラムを受けている新入生を心配しています。全ての生徒の英語力が十分であるかどうか明確でないため、学習上の利点を受け入れられません。」とOle Våge氏はNRKに語った。

「教育に英語だけが使われているのは大きな問題です。大多数の人々は卒業後ノルウェーで働くでしょうから。」と彼は続けた。

Våge氏は、英語による授業は有益だが、ノルウェー語を犠牲にしてまで優先するべきではないと述べた。

「ノルウェー語と英語の両方を使うことは大変自然なことです。しかし一部の授業では英語の教科書だけを使用していることがわかりました。」と彼は述べた。

NRKの報告によると、ノルウェーの学生自身は、授業に使用される英語の量について、それほど批判的ではない。ノルウェー学生組織のMats Johansen Beldo氏は、スカンジナビアの国の大学やカレッジでは英語は過度に使われている訳ではないと言った。

「私たち学生は、問題だとは思っていません。英語の本は良いものであり、学問に必要な情報を得ることができます。」と同氏は放送局に語った。

オスロ大学副学長Gro Bjørnerud Mo氏は、ノルウェー語は大学の授業における主要言語であり、授業で実際に使用される英語の量は各授業によって異なると語った。

「我々は言語の使用方針と、授業カタログの中の英語と他の言語とのバランスを注意深く監視しています。」と彼女は語った。

【出典】The Local Norway

<https://www.thelocal.no/20170816/norway-universities-criticised-for-overuse-of-english>

ノルウェー：ノルウェー人はスウェーデンで成功を目指す

ノルウェー人失業者は、母国の石油ブームが衰退したため、スウェーデンのより良い環境に移ることを強く促されている。かつて若いスウェーデン人のノルウェー移住が流行したが、その逆転現象である。

スウェーデンの失業率はここ数年、下降傾向にある。6月には、18歳から24歳のスウェーデン人失業者数は、去年の同月と比較して11,000人減少した。

しかし、国境を越えると状況は著しく異なり、ノルウェー統計局によると15歳から24歳のノルウェー人失業者数は過去2年間で22,000人増加した。

スウェーデン人が仕事のためノルウェーに移住する傾向があることは良く知られており、2011年から2014年の間にピークを迎えた。賞を獲得したスウェーデン映画「Underdog」のテーマにもなった。

しかし、金融専門家は、現在若いノルウェー人に、スウェーデンとりわけ建設業界、教育、コンピューターエンジニアリングの分野で仕事を探すようアドバイスしている。

ノルウェーのNy Analyze研究所のチーフエコノミストTerje Strøm氏は、「ノルウェー人はスウェーデンで富を築くべきです。絶対に行く価値があります。」とノルウェー放送局NRKに語った。無職の石油労働者でさえも、ノルウェーを離れスウェーデンに向かうべきだと彼は付け加えた。

「スウェーデン産業で数年間働くことは、将来ノルウェーで労働市場が改善された時に、非常に役に立ちます。」

「過去10年間で、10万人以上のスウェーデン人がノルウェーの労働市場にやって来て、この地を助けてくれたので、今度はノルウェー人がスウェーデンに行くべきです。」

スウェーデン人は、ポーランド人に次いでノルウェーで2番目に大きい移民グループだが、去年は21世紀以降で初めて、ノルウェーにおいて、スウェーデン人の同国からの移出が、同国への移入を上回る負の純移動率が示された。

「スウェーデン内の労働需要は依然として非常に高いものの、ノルウェー内での労働需要は、過去1年間、非常に低い状況にあります。」とスウェーデン銀行のノルウェー経済学者Harald Magnus Andreassen氏は12月、Aftenpostenに語った。

「現在のスウェーデンの求人はこれまで見たことがないほど多く、もはやノルウェーに行く理由は全く見当たりません。」

【出典】The Local Sweden

<https://www.thelocal.se/jobs/article/norwegians-told-to-look-for-their-fortune-in-sweden>

デンマーク：多くの若者は就職を見据えた専門分野の選択を行う

デンマーク高等教育・科学省によると、多くのデンマーク人は、ITなど労働力不足の分野での専攻を希望している。

コペンハーゲンIT大学では、昨年以降出願数が39%増加し、高等教育機関において過去最多の上昇率を記録したと高等教育・科学省は発表した。当該大学の今年度の出願状況調査によると、医学や工学などの医療、工業、自然科学の学位への出願が相対的に増加している。

Søren Pind大臣は、「大学で何を学ぶのか選択する際に、自身のキャリアを考慮するよう呼びかけている政府のアドバイスに若者が耳を傾けてくれたというのは喜ばしいことです。より多くの若者が労働市場にニーズのある分野で学びたいと考えており、彼らが卒業してすぐ就職することができれば、社会と若者の両方にとって大きなメリットです。」と記者会見で語った。

対前年比で、全出願数は3%減少し、芸術(26%)と神学(20%)は、大幅な減少となった。

【出典】The Local dk

<https://www.thelocal.dk/20170706/more-danes-applied-for-study-programmes-with-best-job-prospects-ministry>

デンマーク：高等教育予算の削減と修学期間の短縮を議会で議論

社会民主党を除くデンマークの主要政党は、2013年に導入された不人気の改革を廃止することに賛成している。その改革とは、卒業までの修学期間短縮を目的とし、一定の目標を満たさない大学に対して財政的罰則を課すといったものだ。

デンマークの学生金融システムすなわち、SU奨学金の柔軟性の低下につながる当該改革は、学生にはかなりの不評で、コペンハーゲン中央部では反対する学生1万人が、当時の担当大臣に抗議を行った。

一方で、2016年卒業生の公式統計は、2019年にはデンマークの全ての大学で、平均して4.3ヶ月間の修学時間を短縮するとした目標に大幅な改善と良好な進展を示している。2016年時点で修学期間は3.9ヶ月短縮された。

政治家の過半数は、卒業後の就職に成功した卒業生数と、各大学における学生の年間の履修科目数を関連付ける「多面改革」も廃止したいとも考えている。

2つの改革は大学と学生組合によって激しく批判された経緯があり、財務省と高等教育・科学省から長期的な圧力を受けることとなった。

Søren Pindデンマーク高等教育・科学大臣は、政党と同省の間で進行している、現行の卒業生の数に応じて大学に予算配分されている「タクシーメーターの原理」に代わる、まだ合意に達していたい新たなモデルに関する非公開の交渉に基づき、改革の有効性について再考を重ねている。

University World Newsが以前報道したように、提案された新資金モデルでは、修業年限から3ヶ月後の卒業生数、また卒業から2年以内に就職した学生の割合に従って、10%の資金が割り当てられる。

Pind大臣が所属するノルウェー自由党は、新資金モデルが過去の2つの改革に取って代わり、それらは不要になるだろうと提案している。このため、2つの改革の廃止が、現在の交渉の起こり得る結果であるとPolitiken新聞社は先月伝えた。

【出典】University World News

<http://www.universityworldnews.com/article.php?story=20170816094502659>

フィンランド：エラスムス・プラス中間評価～フィンランドで「十分機能している」～

フィンランド国内におけるエラスムス・プラスの実施に関するEUの中間評価報告書が完成した。欧州委員会と加盟国は、2014年から2020年までのプログラム期間の半分が終了した時点で報告書を提出する義務がある。

エラスムス・プラスは、フィンランドにおける教育の国際化を促進する最も重要なプログラムであり、留学は、特に高等教育分野におけるフィンランド教育の不可欠な要素となっているが、国際化と留学は、教育分野全体において戦略的に重要な課題とみなされている。

エラスムス・プラスは、フィンランドの若者の国際化に著しく貢献し、ヨーロッパにおける若者の仕事の質を向上させた。このプログラムは、最も脆弱な若者にも国際活動に参加する機会を提供し、社会参画を促した。

結果として、エラスムス・プラスはフィンランドではうまくいっており、増加するプログラム予算も効果的に活用されている。また、教員の専門知識・技能、教授法、異文化理解の考え方にも重要な影響を与えた。

【出典】Ministry of Education and Culture, Finland

http://minedu.fi/en/artikkeli/-/asset_publisher/erasmus-ohjelma-tukenut-merkittavasti-koulutuksen-kansainvalistymista-ja-nuorisotyota

フィンランド：教育輸出を加速させるフィンランド国立教育機関

6月初旬、フィンランド国立教育機関(EDUFI)は、フィンランドの教育輸出を強化するための任命を受けた。新成長プログラムである「フィンランド教育」は、企業、高等教育機関、その他の教育訓練機関が国際市場を拡大するための支援をしている。

2014年のフィンランド教育輸出額は2.6億ユーロであったが、多くの可能性を秘めており、2018年末までに売上高を3.5億ユーロまで増加させるという目標を設定している。

フィンランド企業が開発したデジタルラーニングはすでに世界中で実績があり、カタールとアラブ首長国連邦の学校では、フィンランドの教授法が取り入れられ、フィンランド人の教員が働く学校が設立されている。フィンランドの優れた教員研修は、サウジアラビア、コロンビア、インドネシア、南アフリカなどの国々で活用されている。また、カリキュラム開発や幼児教育と幼児のケアにおけるフィンランドの専門知識も国際的な関心を集めている。

来年の初旬には、職業教育及び職業訓練改革により、職業資格の輸出が解禁される。EDUFIはすでにパイロットプロジェクトを運営しており、11の研修機関が20カ国に職業能力を基礎とした資格を輸出している。

教育輸出は全ての教育段階で実施可能である。リベラル成人教育機関だけでなく、一般の高等学校でも教育の輸出を開始することに関心を表明している。フィンランドの教育輸出の最も有望な市場として中国、ペルシャ湾岸のアラブ諸国、東南アジア、中南米、アフリカが挙げられる。これらの領域に加えて、職業教育及び職業訓練を輸出するパイロットプロジェクトは、ロシア、米国、インドを対象としている。

このプログラムのリーダーとして、Lauri Tuomi氏が任命され、7月24日に就任した。同氏は起業家及びハーガヘリア応用科学大学の副学長としてフィンランド教育の輸出を推進している。

また、2017年初頭に、成長プログラムの運用モデルを開発するプロジェクトの責任者を務めたほか、2016年には教育輸出に成功した国に関するベンチマークレポートを作成した。

【出典】Finnish National Agency for Education

http://www.oph.fi/english/current_issues/101/0/finnish-national-agency-for-education-to-boost-education-export-education-finland-growth-programme-launched

リトアニア：リトアニアの教育費の対GDP比率が、EU28カ国内で第12位

最新の欧州連合統計局指数において、リトアニアは、教育費の対GDP比率がEU諸国平均よりも高く、EU加盟国28カ国のうち、第12位にランクされた。

リトアニアは2015年にGDPの5.4%に相当する20億ユーロを教育に費やしており、EU諸国の平均である4.9%を上回っている。

リトアニアの比率はラトビアやエストニアよりも低い、ポーランドよりも高い。

EU全体で最も高い教育支出水準は、デンマーク(対GDP比の7%)、スウェーデン(同6.5%)、ベルギー(同6.4%)と続く。一方、最も低いレベルはルーマニアで、2015年に対GDP比の3.1%が教育費に充てられた。

【出典】The Baltic Times

<https://www.baltictimes.com/lithuania-ranks-12th-in-eu-on-education-spending-level/>

ノーベル財団

Alfred Nobelの遺言に基づいて設立された民間機関。ノーベル賞運営機関を代表し、基金の管理、ノーベル賞に関する広報活動、ノーベル賞受賞者の選定、授賞式の実施、商品・賞状の授与を執り行う。

1. 組織概要

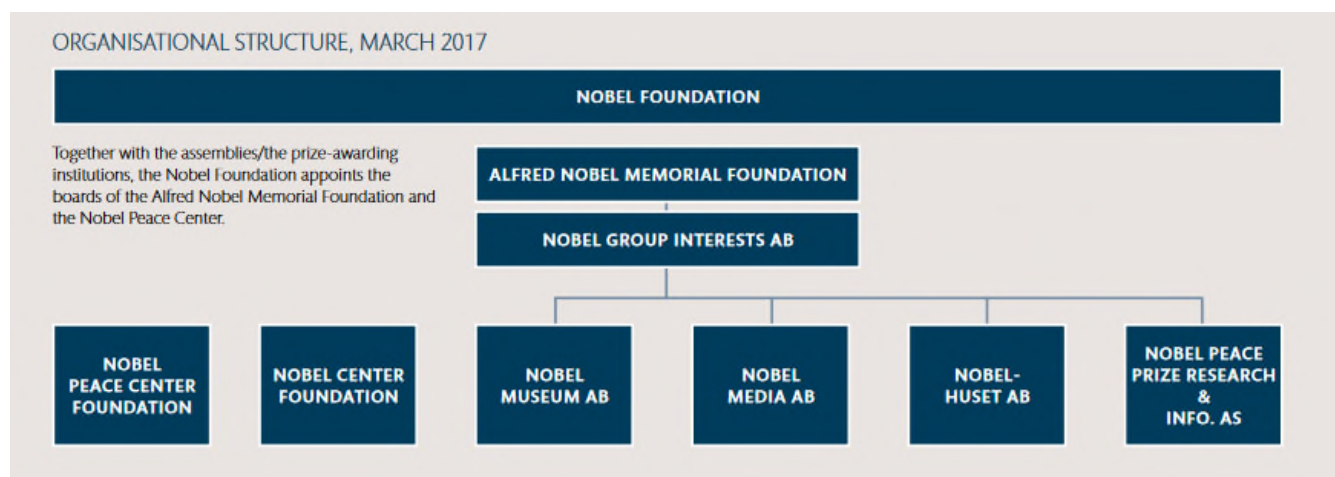
○設立: 1900年

○概要: Alfred Nobelの遺産を運用し、ノーベル賞の資金や運営費を確保している。同時に、同賞の授与機関として、受賞者の選考過程には関与せず独立性を維持している。また、毎年12月10日に開催される授賞式及び晩餐会を含むノーベル・ウィーク全体の企画・運営を所管している。このほか、100年以上にわたる同賞の歴史において構築されたブランドと無形遺産の管理・開発を通して、同賞の地位強化に尽力している。

○構成員: 理事会: 9名、事務局長: Lars Heikensten、職員数11名

○資産: 42億SEK (*約567億円) (2016年12月現在)

○組織:



【出典】ノーベル財団 -The Nobel Foundation 2016 Annual Review
https://www.nobelprize.org/nobel_organizations/nobelfoundation/

2. 主な傘下組織

(1) ノーベル・メディア

毎年授賞式の前日にスウェーデンで公開シンポジウム「Nobel Week Dialogue」を開催。本年はスウェーデン・ヨーテボリで開催予定。詳細は以下を参照:

<https://www.nobelprize.org/events/nobel-week-dialogue/>

授賞式の生中継の権利を有するとともに、ノーベル財団オフィシャルホームページの管理を行う。

また、日本学術振興会との共催により、2015年、2017年に東京で、「ノーベル・プライズ・ダイアログ」を開催。次回は2018年3月に横浜で開催予定。詳細は以下を参照:

<https://www.jsps.go.jp/j-donation/nobelprizedialogue.html>

(次項へ続く)

ノーベル財団

(2) ノーベル博物館

自然科学と文化に関する知識を広げ、興味を創造することを目的に、2001年にストックホルムに設立され、Alfred Nobelやノーベル賞受賞者などを紹介年間を通して大人向けのセミナーや講演会や「ノーベル・クラブ」という子供向けの催しも開催している。

毎年12月にはノーベル賞受賞者を博物館内のカフェでのランチに招待し、受賞者から椅子の裏にサインをもらっている。このサインをされた椅子も見どころの一つとなっている。

2017年7月、安倍総理がスウェーデンを訪問した際に同博物館を来訪した。年間の来場者は国内外から約17,000名。

(3) ノーベル平和センター

ノルウェーの独立100年を記念し、2005年にノーベル平和賞の授賞式が行われるオスロ市庁舎の向かいに設立された。ノーベル平和賞の歴史や歴代受賞者の画期的な活動を紹介するほか、戦争、平和、紛争の解決に関する常設展と特別展を開催している。

同センターは、ノルウェー国内で最も現代的な博物館で、大人向けの展示物のほか、子供向けの展示やゲームなども多数用意している。ハイテク設備も充実しており、毎年、世界各国から多くの観光客が訪問している。



【出典】The Official Web Site of the Nobel Prize
<https://www.nobelprize.org/>

カロリンスカ医科大学

世界最大の医学系単科教育研究機関であり、スウェーデンを代表する大学の一つである。1901年からノーベル医学・生理学賞の受賞者選考を行っている。人間の健康の向上に多大な貢献をすることを目的に、①教育、②研究、③社会との連携、に主眼を置き、地域社会と交流することを使命としている。国内で最も幅広い医学コースと授業を提供している。

1. 組織概要

- 設立: 1810年
- 学校種: 医科大学
- 学長名: Ole Petter Ottersen
- 学生数: 5,973名 / うち留学生の数: 受入319名、派遣148名
- 大学間交流協定数: 約227、41ヶ国
- 職員数: 5,193名 (うち常勤は4,694名) / 教授数: 853名 (うち女性の割合は48%)
- 主な卒業生:
 - Axel Hugo Theodor Theorell (ノーベル医学・生理学賞受賞者)、Ulf Svante von Euler (ノーベル医学・生理学賞受賞者)、Torsten Nils Wiesel (ノーベル医学・生理学賞受賞者)、Sune Karl Bergström (ノーベル医学・生理学賞受賞者)、Tomas Robert Lindahl (ノーベル化学賞受賞者)
- 収益: 6.7億スウェーデンクローナ (* 約94億円)
 - ・うち、政府資金43%、研究評議会15%、その他政府機関5%、市町村6%、財団・団体23%、民間企業7%、その他1%
- 備考:
 - ・世界大学ランキング
 - Times Higher Education World University Rankings 2017/18: 第38位
 - QS World University Rankings 2016/17 (医学・生命科学分野): 第7位
 - ・ノーベル賞の医学・生理学賞の選考委員会を同大学内に設置
 - ・毎年12月には、カロリンスカ医科大学において、ノーベル医学・生理学賞のノーベル・レクチャーを開催
 - ・カロリンスカ大学病院とは別組織であり、大学の教育医療機関として提携

2. 日本との関わり

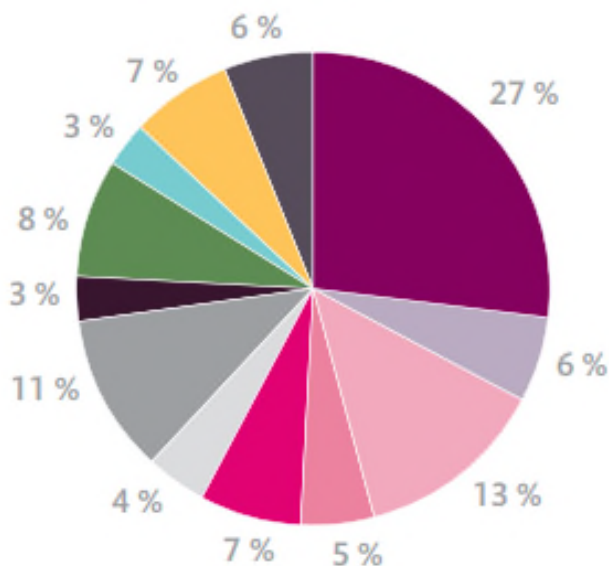
- 日本学術振興会
 - ・「研究拠点形成事業」で日本の研究機関と共同研究を実施
 - * 日本側研究機関: 東京大学大学院農学生命科学研究科
 - * テーマ: 「高齢化時代に克服すべき疾病の予防法開発に向けた新しい分子基盤の構築」(その他の参加国: スペイン、米国)
 - * 研究期間: 2012年4月～2017年3月
- 理化学研究所
 - ・各種協定を締結
 - * 2001年11月 ゲノム(オミックス)科学分野における研究協力協定の取決めに基づき、研究者交流等の協力
 - * 2004年10月 包括協定を締結
 - 2007年10月
 - 2010年12月
 - 2011年 2月
 - 3月
 - 5月
 - 12月
 - 2012年 3月
 - オミックス科学分野における
共同研究契約を締結
 - * 2010年11月 博士課程学生のための国際集中講義を実施

(次項に続く)

カロリンスカ医科大学

○2016年度学生所属内訳

FTE students 2016 (5,973)

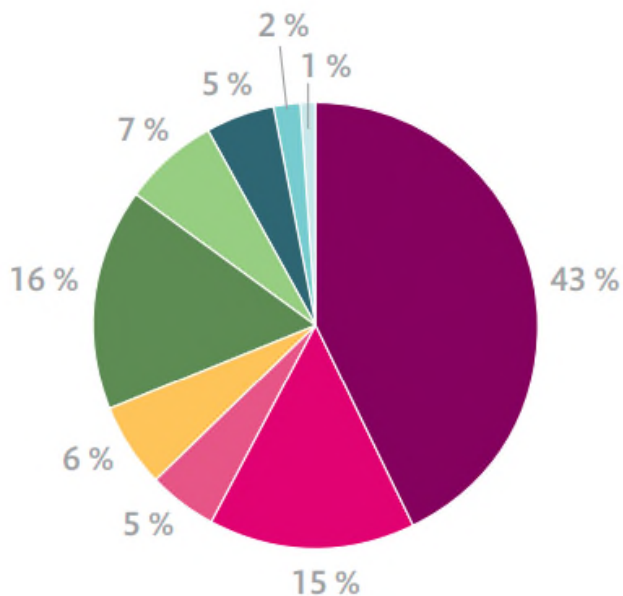


- Medicine 27 %
- Physiotherapy 6 %
- Nursing 13 %
- Psychology 5 %
- Dentistry 7 %
- Occupational therapy 4 %
- Other beginner's programmes 11 %
- Biomedical laboratory science 3 %
- Specialist nursing (continuation) 8 %
- Other continuation programmes 3 %
- Master programmes 7 %
- Freestanding courses 6 %

Source: Ladok.

○2016年度財務収入内訳

Revenue for 2016, SEK 6,667 million
in total (SEK 6,475 million)



- Direct government funding 43 % (43 %)
- Research councils 15 % (15 %)
- Other government agencies 5 % (6 %)
- Municipalities and county councils 6 % (7 %)
- Swedish foundations and organisations 16 % (16 %)
- Foreign foundations and organisations 7 % (7 %)
- Swedish companies 5 % (4 %)
- Foreign companies 2 % (1 %)
- Financial income 1 % (1 %)

○2013-2016年 学位取得者数一覧

Number of degrees awarded 2013-2016

Degree	2013	2014	2015	2016
Professional qualifications	1,256	1,432	1,578	1,479
General qualifications	891	1,106	1,246	1,217
Total number of degrees	2,147	2,538	2,824	2,696
Total number of individuals	1,758	1,964	2,105	1,946

Source: Ladok.

【出典】カロリンスカ医科大学
http://ki.se/en/about/financial-reports?_ga=2.98200735.1465615923.1509036054-323968449.1465299327

イベント予定

セミナー・シンポジウムの開催については随時ホームページでお知らせしています。詳細は、ストックホルム研究連絡センターHP(<http://www.jsps-sto.com/activities.aspx>)を御覧ください。最新情報を御希望の方は以下のURLから登録してください。

<http://www.jsps-sto.com/contact.aspx>

Norway-Japan Academic Network

ノルウェーにおける日本人研究者、JSPS事業経験者、日本に関心のあるノルウェーの研究者、文科省国費留学生をはじめとする研究者間のネットワーク構築・学術交流の促進を目的とした会合を年1回開催します。

日 時:2018年1月31日(水)

会 場:ノルウェー研究評議会(ノルウェー)

Sweden-Japan Academic Network

スウェーデンにおける日本人研究者、JSPS事業経験者、日本に関心のあるスウェーデンの研究者、文科省国費留学生をはじめとする研究者間のネットワーク構築・学術交流の促進を目的とした会合を年1回開催します。

日 時:2018年2月14日(水)

会 場:スウェーデン王立科学アカデミー(KVA)(スウェーデン)

Japan Alumni and Researcher Assembly 2018 in Denmark

デンマークにおける日本人研究者、JSPS事業経験者、日本に関心のあるデンマークの研究者、文科省国費留学生をはじめとする研究者間のネットワーク構築・学術交流の促進を目的とした会合を年1回開催します。

日 時:2018年2月23日(金)

会 場:コペンハーゲン・デンマーク(調整中)

事業の御案内

二国間交流事業(共同研究・セミナー)

本事業は、個々の研究者交流を発展させた二国間の研究チームの持続的ネットワーク形成を目指し、我が国の大学等の優れた研究者(若手研究者を含む)が相手国の研究者と協力して行う共同研究・セミナーの実施に要する経費を支援します。

<http://www.jsps.go.jp/j-bilat/semina/jrss.html> (日本語版)

<http://www.jsps.go.jp/english/e-bilat/index.html> (英語版)

外国人研究者招へい事業

(Fellowship Programs for Overseas Researchers)

本事業は、諸外国の優秀な研究者を招へいし、我が国の研究者との共同研究、討議、意見交換等を行う機会を提供することにより、外国人研究者の研究の進展を支援すると同時に、外国人研究者との研究協力関係を通じて、我が国の学術研究の推進及び国際化の進展を図ることを目的とした事業です。

平成30年度採用分募集要項をJSPSのHPにて公開中です。

https://www.jsps.go.jp/j-inv_researchers/index.html (日本語版)

https://www.jsps.go.jp/english/e-inv_researchers/index.html (英語版)

公募中のプログラム

募集期間:2017年10月27日～2018年2月28日

・外国人特別研究員(欧米短期)

<http://www.jsps-sto.com/fellowship-short-term.aspx> (英語)

・外国人特別研究員(一般)

<http://www.jsps-sto.com/fellowship-standard.aspx> (英語)

募集期間:2017年10月31日～2018年2月8日

・サマープログラム

<http://www.stint.se/1/263> (スウェーデン語)

その他

カロリンスカ医科大学 (Karolinska Institutet (KI)) 同窓会会員募集

KIでは過去・現在問わず、在籍されていた方々のためにKI Alumni & Friendsを設立し、様々なイベントの企画、メールマガジンによる情報提供を行っています。KIに在籍したことがあり同窓会に関心がある方は是非以下のホームページを御覧ください。

<http://ki.se/en/collaboration/ki-alumni-and-friends>

JSPS Stockholm Newsletterの定期購読について

ニュースレターの定期購読を希望される場合、1. 氏名、2. 所属機関・部署、3. メールアドレスを jspsto@jspsto.com までお送りください。電子メールにて配信します。



表紙写真:ゴットランド島の街並み

ゴットランド島はスウェーデンの南部に位置する同国最大の島である。古都ヴィズビューはハンザ同盟時代の砦、城壁のほとんどを完全に残しており、その美しさを求めて夏には国内外から多くの観光客が訪れる。宮崎駿監督「魔女の宅急便」のロケ地の一つとしても知られるこの街は、首都ストックホルムとはまた違う魅力を放っている。

(撮影 山下史恵)

次号の発行予定日:

次号は2018年2月下旬に発行予定です。

JSPS Stockholm Newsletter 第56号

編集長: 吉原 誉夫

編集: 山下 史恵

発行日: 2017年11月17日

発行元: 日本学術振興会ストックホルム研究連絡センター

連絡先: JSPS Stockholm Office, Retzius väg 3, 171 65 Solna, Sweden

Phone: +46 (0) 8 5248 4561

Website: <http://www.jspsto.com/> E-mail: jspsto@jspsto.com

Facebook: <https://www.facebook.com/JSPS-Stockholm-Office-1793731447305912/>

JSPS
STOCKHOLM